

植物を育てるうえで大事なことは「毎日の観察」です。
実際の栽培とは「水分・日光をいつ・どれだけ与えるか」
を判断することです。
適切なタイミングと量を計るため、毎日の観察を大事にしましょう。

「何日に一回水をあげる」「何月に肥料をあげる」
といった数字は疑いましょう。
乾いたら、とか成長期だから、とか
植物のコンディションを基準に考えてください。
ここぞというタイミングでしっかり与えるイメージを持ちましょう。

植物は屋外栽培を基本とします。
当然直射日光や雨に曝されることになりますが、
遮光や雨よけなどでそれらを引き算して与えます。
足りない部分を人間が判断して与えましょう。
ベストな置き場所選び(場所づくり)は最も大事かもしれません。

照明は日光の代わりにはなりません。
植物育成ライトは、青と赤の波長が含まれるものを。
それでもやはり日光がベストです。

そもそも栽培とは不自然な環境で植物を育てることです。
そして、不自然であることは悪いことではありません。
よく「自生地を環境を参考にしましょう」と言われますが、
自生地では厳しさゆえに多くの個体が淘汰されます。
自生地の環境を理解したうえでそのネックな部分を避けられるのが
「不自然な環境」のいいところです。

植物の成長は先端(成長点と呼ばれる部位)に
細胞を積んでいくイメージです。
一度作った部分が再度成長することは基本的にありません。
どの部位になるか決まっていな細胞が常に準備していて、
そのときの条件によって葉になったり花になったりします。

一度枯れたり傷ついた部位は治りません。
植物は傷を治すより、そのぶん新しい組織を作ることで
全体としてリカバリーします。

植物には成長期と休眠期があります。
多くは気温と日照時間などの条件で決定されます。
環境を調整すれば常に成長することもあります。

イメージを持ちましょう。

水と日光の感覚

以下に書くことは多くの植物に共通した性質です。
ただし、細かいパラメータは植物の種類ごとに適宜変わってきます。
「その植物にとっての」適温、条件、デッドライン・・・
など、当てはめて考えてください。

日光に関しては、成長に適した温度圏内かそれ以下でなら、
できるだけたくさん当てるのがよいです。
日光が不足すると草姿が乱れたり(徒長)、光合成も不足します。
結果として、長時間日光に当てられたら長生きします。

ただし、強い日照と高温が重なると葉焼けなどの障害も出ます。
「過ぎたるは猶及ばざるが如し」ですが、
不足した場合のほうが調整もリカバリーも難しいので
できる限りギリギリまで日に当てることをおすすめします。

水に関しては、欲しいタイミングで与えるのがベストです。
具体的には成長のための日照/温度条件がいいとき・・・
例えば夏型多肉種なら気温25℃前後で
晴れの日が続くときにあげるようにします。
この条件が満たされていても、土が乾かないうちは与えません。

一回の灌水量は、鉢一杯と同量くらいを基本とします。
水が底穴から流れるくらい与えることで鉢の中に酸素が行き渡り、
温度を下げることでメリハリを与えます。
半端な量をやると根腐れの一因にもなります。

水やり自体はリスクと隣り合わせの行為です。
たくさんあげて失敗した場合、イコール腐死であることが多く、
多肉/サボテンは逆に乾燥させるぶんには相当耐えるので、
水を与えてよいか不安なら与えないほうがよいでしょう。

あとは、乾いて湿ってのメリハリを繰り返してやることで
根が盛んに張ってくるので(乾くタイミングで根が張る)、
ある程度乾いてからあげると根腐れ対策にもなって一石二鳥です。
成長できるときにできるだけ成長させると、
苦手な季節を越させるのもぐっと難易度が下がります。

それ以外では、通風が意外に重要です。
無風環境に長く置くと、端々に不調が現れてきます。
また空気の流れは空中の湿度と密接な関係にあり、
湿度の変化は植物の吸水量にも関わってきます。
まずはシンプルに、風通しの良さを確保しましょう。

植え替えの手順

①鉢の準備

今植わっている鉢と同じか少し深い鉢を準備します。
鉢底の穴が見えなくなる程度に軽石を薄く敷きいれます。

②土の準備

鹿沼土、赤玉土、日向土、ゼオライトor燐炭少量を混ぜ、
ふるいにかけます。
今回は出来合いの培養土を使うため、配合は不要です。
ふるいのみかけてください。

③植物を鉢から抜く

一度に引き抜かず、鉢を横にして揉みながら
するっと出します。

④土/根の処理

軽く振るって、根に絡んだ土以外を落とします。
枯れた細い根は慎重に取り除きます。

ふだん見えていない部分を楽しんでください。

⑤植え付け

植える高さを決めます。
植物の下部分が少し土の中に埋まるくらいにします。
その位置に植物を持ちながら土を入れていきます。

少し入れたら鉢を揉んだり軽くたたいたり、
棒でほぐして隙間なく土を入れます。

繰り返してぐらつかなくなるまで土が入ったら完成です。

植え替えの関連知識

○目的

根を健康に保つために植え替えをします。
根が伸びるスペースを確保する、枯れた根を取り除く、
古い土を入れ替える、根の状態をチェックするなどをします。

植え替え自体はリスクを伴う処理です。

根はデリケートな器官であり、不適切な扱いをすると
成長に影響が出たり、最悪の場合枯れることもあります。
ですが、リスクを理解して適切な方法をとれば難しくはありません。
正解はひとつではなく、環境しだいで最適な選択は変わります。

○時期

一般的には成長期の前に植え替えするのが適しているとされます。
植え替えの適期は種類によって、また成長度合いによっても変わってきます。
基本的には若い苗ほど頻繁に植え替えるようです。
4号鉢までのサボテンなら毎年、それ以上なら2～3年に一度のペースです。

○処理

根(特に先端部)を傷つけないように注意します。
抜き苗の状態の数日乾かしてから植える派と、
すぐに植える派がありますが、場合によりどちらでも大丈夫です。
根が傷ついてしまった場合は抜き苗の状態の数日乾かして
傷口がふさがってから土に植え込みます。

言い換えれば根に傷がついていなければそのまま植えていいのですが、
目に見えないくらいの傷がついていたら怖いからと
念のために乾かすことが慣例化しています。
これらの理由を理解していれば、
土に植え込むタイミングは自由に決めてよいと思います。

サボテンは根を切ってから植えると言われます。
根は大きく2つ、植物を支える機能と水を吸う機能を持っており、
太い根(主根)が支える機能を、主根から生える細い根(細根)が
水を吸う機能を担当します。
また、細根は寿命があり、水を吸わなくなった古いものは
新しいものに入れ替わっていきます。
そのため、植え替え時に取り除く根とは
「古くなって死んだ細根」のことを指すようです。

土の関連知識

人によって大きく違うかと思いますが、いろんな正解がある部分です。
土のパラメータとして、以下の3つの観点から考えて
最適な配合を見つけましょう。

科学性(栄養と酸度)
物理性(保水性、排水性、団粒構造)
生物性(微生物の種類)

酸度は酸性～アルカリ性のこと。
日本は雨が弱酸性なので、自然に弱酸性あたりになっていきます。
サボテン多肉はだいたい弱酸性で問題ないです。
アルカリ性土壌は管理が難しい(栄養素を吸収しづらい、
管理の許容幅が狭い)ので難しいと言われます。
現地がアルカリ性土壌の種でも弱酸性で
問題なく栽培された記録もあります。

物理性については、サボテン栽培では排水性が重視されます。
多くのサボテンが乾燥に強く過湿に弱い性質のため、
水はけのいい粒状の用土が定番です。
(プラ鉢を使うのも、水はけを一定にして
管理しやすくする狙いがあるためです)
乾きすぎるなら頻繁に水やりすれば調整できますが、
逆は難しいので保水性を強めることはほぼありません。

よく「水はけがよく保水性のある土」
という形容をすることがありますが、これは
「土の粒の間に水が溜まらず、土の粒の中に水分を保てる」
という意味です。
また、微塵(土粒が崩れた粉)が多いとそこに
水が溜まってしまうので、できる限りふるいで取り除く、
もしくは初回の灌水を多量にして流し出すことで対策します。

生物性は有機肥料の効き目に影響する部分なので、
サボテン栽培であまり話題になることはありません。